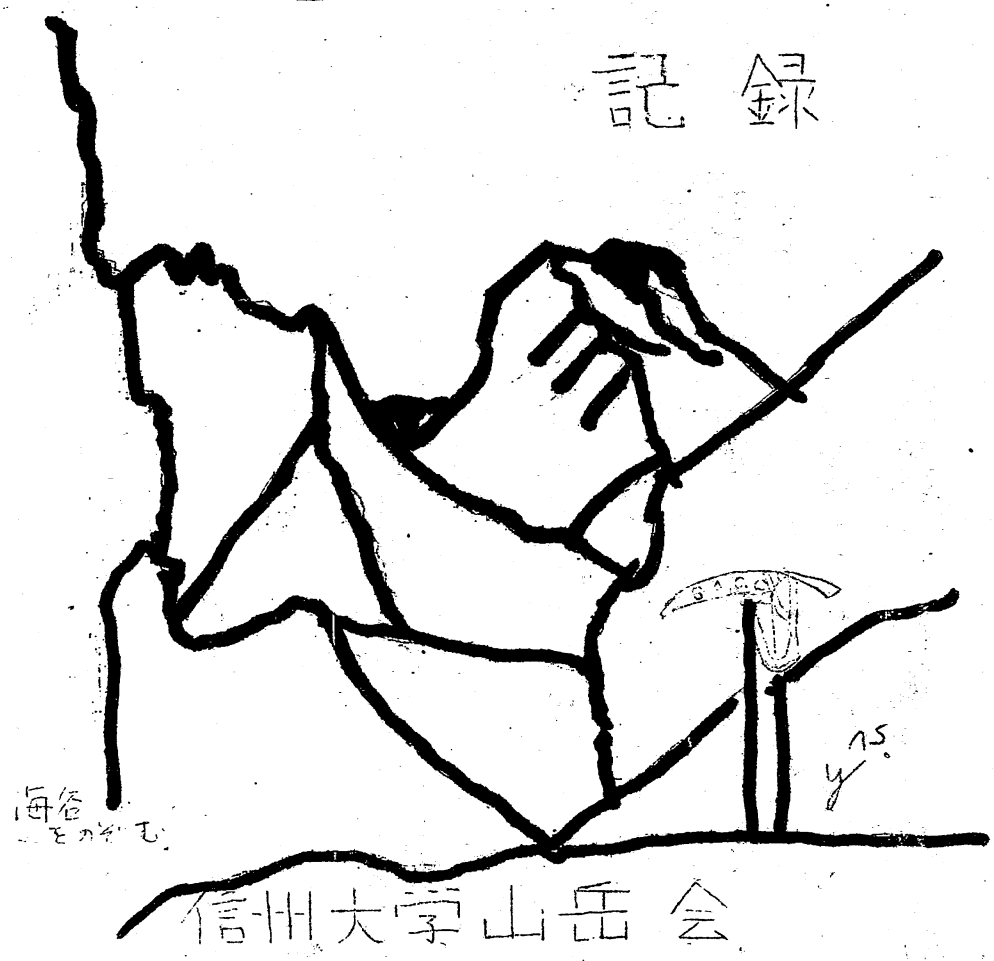
?---秘境---?

越後の山

海谷山塊

記録



1日 180
0.18
6名
72
3名
4.32

信州大学山岳会
伊那松本山岳部

海谷山行を終わって

[illegible]

今回の個人山行は僕の個人的な欲望からはじまりました。しかし！年時の最後の山行であることから、我々の心の中には、一年間の総決算という気持があったと思います。

その意味で海谷は十分だったと思います。アプローチ、岩場の技術から、アイゼンを使った雪上技術まですべてを使って登る事が出来ました。各自一年間をふりかえって、ここまで成長した自分におどろき、さらに二年時、そして新しい山行への意欲を感じたのではないでしょうか。

またリーダーシップ、メンバーシップという面で、この一年生同志の山行はその難しさを教えてくれました。

地図を見ルートをさがし自分の力でピークをふむという楽しさも味わえました。

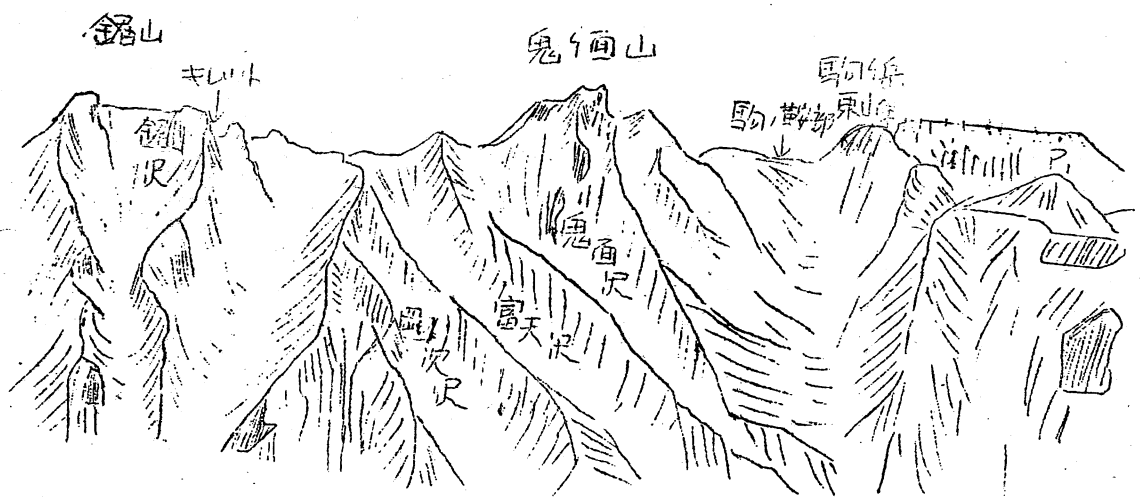
短かい期間の山行ではありましたが二年からの僕達にとって大事な山行だったと思います。

こまかい反省も色々あげられますが、ここでは、ここまで口をはさまない事にして各自自分の為にいかせばいいのではありませんか。

最後にリーダーのあいまいさから色々めいわくをかけたと思いますがお許し下さい。

まだ、西海谷、海川の遡行が残っています。そして駒屋の岩壁（今月末頃に長野が入山します）、火打の東面などあの辺にはよい所がたくさんあります。皆さんどしどし行って下さい。

「鉢山より西海谷山塊」



1 計画概要

期日 1967年3月25日～3月31日

場所 海谷山塊一烏帽子岳、阿弥陀山、鉢山、駒岳、鬼面山

連絡先 新谷剛
松本市女鳥羽町1/9/15.

参加者 L 笠原邦樹 農林1 気象 記録 渉外
猪飼啓之 農畜1 食糧 会計
山下泰弘 農農1 装備 医療

2 山行経過

3月25日 松本一糸魚川一発電所.(晴)

3月26日 発電所一732高地 BC設営(晴)

3月27日 沈殿(強風雨.一時晴)

3月28日 BC一阿弥陀沢上部一BC.半沈(雨ガス一時晴)

3月29日 BC一鉢沢一鉢山一阿弥陀山南峰一北峰一烏帽子岳一阿弥陀沢一BC(晴)

3月30日 BC一糸魚川一高田(晴)(明明の悪天を予想し下山する)

3月31日 高田一松本. 下界はいいネ!

3 行動の記録　　笠原

一年間の合宿を終わって、気ままな思いで入ろうとした山行でした。しかし「海谷は信大ではだれも入っていないから頑張れ」などとおどかされ、気を重くして入山しました。(?)

ですから詳しく記録すればよいのですが、僕達の力のなさからろくな記録が書けません。

しかし予定した半分だけ登っただけですが、海谷は僕達6つの目でしっかりと見て来ました。いろいろ聞いて下さい。それと数少ない写真もあります。どうかこれらを参考にして海谷を判断して下さい。

3月25日　晴

バスで栗倉まで入る。来海沢までは雪が割ってありトコトコ進む。晴れてあつい。以後雪がやわらかく苦労する。

後前山部落を出てすぐ、猪飼がワリバをつける。皆が持ってこえばよかったと思う。鉢山が大きな岩のかたまりとなって見える。荷が重く雪にうまくよく歩けない。発電所がすぐ目の前になった。もう2時半になる。今日中に1732高地へ入る事をあきらめる。

初めてのルートであり、雪崩危険も大きい。発電所から先は道がついておらず今までよりも困難な歩行が予想される。寝不足で疲労がいちじるしいのにまだ3時間以上もかかる予定である。

以上の理由で発電所のわきにテントをはる。

<コースタイム>

糸魚川10時バス—栗倉10時30分—来海沢11時10分—後前山11時5分～11時35分(昼食)—発電所2時45分

<参考>

バス：頸城鉄道自動車(株)　西海線
[illegible]時間に1日10往復はある。
[illegible]でバスは入る。

3月26日　晴

発電所のすぐ上に見えるコルをめざして登る。そこで見る海谷はすばらしかった。まん中に鉢山がどっかと座り目の前には千数百の岩壁がおおいかぶさるようにつっ立っている。そして雪崩の音が無気味にひびいている。

かんじきのあとがあったのでそれを使って不安定な雪を気にしながら、A点までトラバースをする。目の前は、また目の前の岩壁からも雪崩がおきそうなので荷をおいて偵察にでかける。沢底へ尻セードであり電柱をかけて登る。そこからトラバースしてB点まで行く。目の前の斜面は雪崩の通り道となっている。雪面はかたくしまり上には今にも落ちそうなのがたくさんある。一時はてろて高地へ入るのを止めようかとも思う。

昼飯を食ってそ引返す。

すぐザックを背負って沢へ尻セードであり、さっきのトレースをたどる。岩壁の下は無事通過、しばらくトラバースして川底へ尻セード。ここまではほぼ電線にそって来る。電線は右岸に移るが雪がやわらかいので川底を進む。途中猪倉は斜度がはげしかったのでオーバーシューズをつける。だいたい右岸よりを進む。小屋を見てすぐ左岸へ移る。（右岸を行ってテントをはった方が便利である。雪が少なくなれば左岸は歩けみたいと思う。）

少し登ると目の前にてろて高地が広がる。川がいくつにも流れ雪は2m以上もある。目の前には、左から猿振山そしてその前にあるミヤンダルムとも言うべき岩峰、まっすぐつき上げる阿弥陀沢、阿弥陀山そしてさらに左に助尾根、鉢山とつづく。

後を見ると岩峰が点在する金冠山、鬼ヶ面山がある。

はるか遠くには海川を通して金山の綾線がかすかに見える。

水をくみやすい場所にテントをはる。巻雲がうかべば明日は天気がくずれるかも？　明日は鉢沢ー阿弥陀南北峰ー阿弥陀沢を行く予定。（コースタイムは次ページ下にあり）

〈参考〉

・てろて高地に入るには電線にそって入ったら間違いなかろう。ただしA点付近より

・雪崩の心配がなかったらコルより川底へおりて登った方が楽だと思う。帰りはそうした。

・雪崩落石は12時～1時頃が一番ひどかった。

3月27日　強風雨　午後一時晴

4時頃天気を相談して泊を決める。外は強風雨である。雨漏りがあるのでポンチョ等をかぶせ、張綱で張り直す。

午後は一時日がでてクシュラフ等をかわかす。一日中雪崩落石の音がたえず。雪はどんどん消えニニだけが高くなる。

夕刻からまたくずれ明日は泊とする。しかし午後からでも回復すれば阿弥陀沢から北峰をふみ海谷をながめたい。

3月28日　ガス雨　時晴

5時頃起きたがガスって小雨が降っているので泊を決める。9時半頃まで寝る。外は晴れてはいたがすぐくずれそう。しかし行ってみることにする。すぐ飯を食い阿弥陀沢に向う。取入口小屋までもどってすぐ目の前の出合まで行く。上はガスってきた。

薄振山の岩稜にはガスがわき、その中に雪のつまったルンゼが消えている。デブリに足をとられながら一時程歩く。休まず進む。

デブリも無くなり綾線が近いようだ。でもガスで全然見えず。下から観察しておいた木を右に見うまく進んでいる事を確める。左手にルートをとる。少しとらすぎて岩壁につきあたる。その方向からして二ルンのすぐ下にある沢へつきでている小さな岩稜(C)であろう。右へ少しトラバースすれば抜けられルンゼへ出られると思う。

しかし視界はほとんどきかず雨、雪崩、落石の心配もあるので下る事にする。途中みぞれが降り下では雨になった。テントに着く頃は雨も強くなりガスってきた。外はあられに変わった。

明日も泊かも知れない。しかし天気図から希望ももてる。晴れたら鉢沢を登って西海谷をせいいっぱいかせごう。

<コースタイム>

BC 10時45分 ― 阿弥陀沢上部12時15分～25分 ― 出合12時45分 ― BC 1時30分

3月26日

<コースタイム>

起床5時45分 ― 出発6時50分 ― コル7時30分～8時 ― A点？～10時50分(偵察 昼食) ― B点11時20分～12時 ― 昼食12時10分～25分 ― 1732高地入口2時05分 ― BC 2時35分 ― 就寝8時30分

3月29日　晴

3時に起きる。外は月夜に星空。下はカチカチ。アイゼンをつけて出発。取入口小屋をまわり鉢沢出合まで行く。うさぎの足跡がたくさんある。20分程で沢は二つにわかれる。ガイドブックによると滝が二つある事になっているが分からなかった。30m以上も雪がつもっているのか。さて左へ行く沢は阿弥陀の南山峰へつきあげているのだろう。ふりかえると鬼面山の岩峰が天にむかってかがやいていた。まるで？のように？

右の沢を登って行く。上はいくつもの沢にわかれていくがまっすぐ進む。どこへ行ってもよいと思うが、あまり左をとると南山峰につきあげそして鉢山から遠くなり、また右へとると鉢尾根につきあげるから御用心。うまく阿弥陀のコルにでる。平で峠の小屋が建っていそうな所だ。

目の前には吉尾平が広がりスキーで下りたくなる。そして鉢ヶ岳山土鬼があり直江津も見える。

まず鉢山へ向う。ピークへ続く岩稜はやせていてちょうど屏風をたてたようだ。岩壁の高さは約　m程あろうか。下部はまた雪にうまっているのでそう高くは見えない。

岩稜の末端からとりつくことにする。コルから鉢沢に面した斜面に雪がついているのが見える。鉢山の岩記号のはじまるあたりをめざして進む。そこで最初に稜線へつきあげている雪面を登る。そうとう急でかたいが距離は短かかった。そこを登りきってさっきコルから見えた雪面にでる。下が鉢沢となっているので高度感がある。傾斜も急だ。一歩一歩ステップを切って登り岩稜にでる。背の背となっていてはって渡る。巾30cm程か。両側とも気持よく落ちているが木があるのでそう二わくない。所々雪があり雪庇となって東側へ張出している。その上をおっかなびっくり進む。くず山たら「ハイ ポンコツ 10万円コース」。まもなくキレットにつく。ミコリンゲはたくさんあったが新しいのをつける。ちょうどよい岩がなく苦労する。山下猪飼の順にアップザイルで下る。下りる時はキレットの底より西側へ下りた方がよい。まもなく雪が多くなりピークにつく。ピークは平らで平凡な所だ。

海川をへだてて西海谷が見える。鉢のキレットまで見える。そのうしろには雨飾がデントかまえている。アルプスも見える。南東方向には海川と原流があり焼、火打も見える。

海川は最近はじめてモレーヌの運搬によって完全遡行された

ばかりの沢だ。昼食をたべて、ここまでグリセードを楽しむ。
吉尾平が眼下にれらけ気持はよいのだが、ブロックがあってあまり快適にはすべらないのが残念だ。
続いて阿弥陀山南峰に向う。なだらかな尾根の上を進む。
右側は烏帽子まで続く岩壁となって落ちている。そしてそこには雪ぺが発達して、特に烏帽子へ続く綾線はいやらしそう。
烏帽子岳は頭にたまさがった雪ぺをつけて、エボシをつけているようだ。
南峰はかっこいい。ピークは白い雪の帽子をかぶった岩山峰で、すぐ左にはコブのような岩がそして右下には南北にはる小さな岩綾がある。ここらの岩の間はまっ白い雪でおおわれ、いきいき岩肩の黒さがめだつ。
まず岩綾にそって登る。日ざしがつよくあつい。ピークを左上に見るようになってからピークをめざして登りはじめた。ピークの下についたが直登出来そうもないので右へトラバースする。そしてさっきの岩綾からつづく雪綾にでる。すぐやせぶこぎとなり少し進む。
ほんの2、3mでしかあるがやせていて雪ぺが状になり踏抜きそうなのでアイゼンする。アイゼンもつける。山下猪飼雪原を順に行く事にする。そこをこしつづいて木登りで絶壁(?)をこしピークに立つ。先もとがきれているのでしっかりと両面にピッケルをさし登頂の喜びをわかち合う(?)。
次は北峰だ。北面はまだ雪がかたくアイゼンがきく。一番高い所をめざしトコトコと進む。ふりかえると吉尾平へおちている岩壁がすごい。小さな岩綾を通って雪でおおわれたピークに立つ。割に簡単にこれたが雪が少なかったらもっと大変だろう。
烏帽子まで行くか行かないか相談の結果行く事になる。
皆バテ気味。北東面の急斜面を下って尾根につく。雪がなければ岩綾と思われるが今は一面雪でおおわれている。キレットも分からない。行くか、もどるか、ギャアーギャアー言いながら進む。途中飯をくい、いたすらに登る。雪ぺに注意しながらほぼ尾根すじを行く。ピークの下で5m程岩がでている所がある。そこを登る。左側は雪壁となっている。登りきって左へトラバースして、いっきにピークにつきあげる。
雪ぺがあるので木の上に腰をおろしアイゼンをとる。
帰りは最後ここまでグリセードを楽しみながら下る。少し往路をたどって、途中から右の片を目ざし登る。

登りきると、沢のとっぱだてて、阿弥陀沢がつきあげているコルが見えた。目の前の沢は不動の原、流である。すぐ左に見える阿弥陀北峰につき上げて終わっている。沢へおりてコルに向う。グリセードが楽しめると思ったが、あまり滑べらず残念だった。しかし阿弥陀沢は滑べりそうである。

西海谷をよくながめて下りはじめる。眼下のBCがどんどん近くなっていく。雪がやわらかくあまりよくは滑べらなかったが、ガセードもまじえ楽しかった。

昨日の足跡が残っていた。思った通りちょっと左へよりすぎたようである。それも岩壁の下20m程からである。しかし、ガスの中の歩行と大変なものだと思った。

下部はあいかわらずのデブリで歩きにくかった。小屋をまわらず、川をわたってBCに入る。

今日はほんとうに楽しかった。海谷は僕達の期待をうらぎらなかった。雪と岩の感触をおしげもなく与えてくれた。有難う。

まだ西海谷が残っているが僕の個人的理由とあさっての天候が心配されるので明日下山する事にする。たくさん食って寝る。シアワセイッパイ!

<コースタイム>

起床3時—BC発5時—鉢沢出合5時25分—コル6時20分～30分—尾根取付終了(岩綾入口)7時15分—キレット7時50分～8時35分(アプローザイレン)—鉢ピーク8時50分～9時25分(昼食)—コル10時—阿弥陀南山峰11時15分～12時(アンザイレン)—阿弥陀北峰12時25分—昼食12時50分～1時5分—烏帽子岳1時25分～40分—阿弥陀沢のコル2時25分—阿弥陀沢出合2時45分—BC着3時—就寝8時

3月30日　晴

のんびりと下山の用意をする。昨夜たくさん食ったにもかかわらずたくさんつめこむ。ちと苦しい。

帰路は岩岸の岩壁ぞい(電線ぞい)に下る。来る時海川へおりた地点に出る。往路のまき道を使わず川底をまっすぐ下る。来る時苦労したかがうそのようだ。川底からながめる岩壁は一段と高度を増しすばらしい。A点の下は岩壁になっていた。そこを越してコルをめざして登りはじめる。雪はやわらかいが、来る時ほどではない。コルの手前で一本とったが、なんとここまでワンピッチ。入山の苦しさが思いだされる。

コルを越し発電所まで行く。挨拶をしに行って、お茶をごちそうになる。後前山で入山の時顔見知りになったおじさんの家へ顔をだす。入山の時一本とった木材の積んである所で昼食。来海沢もすぐだと思うとピッチがあがる。途猪飼は靴底がりかけたのでアイゼンをつける。

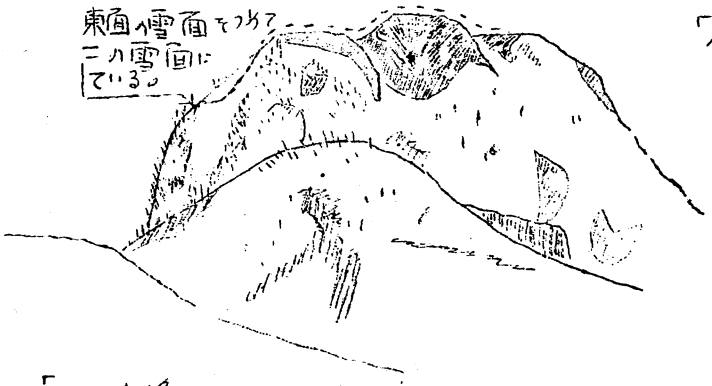
来海沢で少し休み栗倉へ無事到着。3時程待って2時8分のバスで糸魚川に向う。車掌さんの美しかった事。(山下君に詳しくお聞き下さい)。
警察へ下山報告をし高田に向う。

<コースタイム>

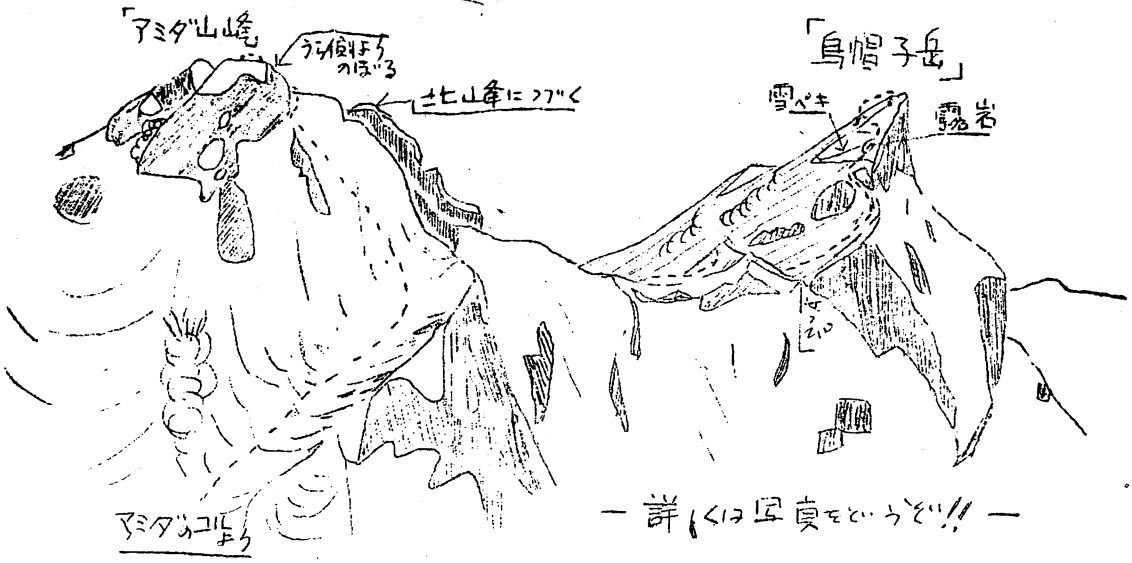
起床5時—BC発9時5分—コル10時45分—発電所10時50分～11時10分(お茶)—昼食12時～45分—来海沢1時10分—栗倉着1時35分。発2時8分—糸魚川着2時45分。

3月30日　晴

直江津から松本へ帰る。装備を点検してハイサヨーナラ。御苦労様



「金木山」(てるて高地より
-----登攀路



—詳しくは写真をごらんください!!—

4 各係の反省

○装備係　　山下

入山の時、予想外の積雪のため B.C.を除き三二高地までラッセルに苦しめられた。ワッパを一組しか持参しなかったのは装備係の手落ちでありました。
ワッパに関しても、もっと大きければラッセルももう少し快調だったと思う。
テントは各テンにフライを持参しようと考えていたのであるが、都合により、雨の時はポンチョで代用することにした。実際にはツェルトも使用したが、これはなかなか快適だった。ポンチョと比較すると強くしっかりと張れるという利点がある。　—以上—

○医療係　　山下

春山に続くすぐの入山であったため、ビタミン不足を心配して毎日与えた。Essenが豪華なせいもあってビタミン不足はなかったようである。
医薬品の量は極めて少くした。消化剤は持参しなかっただので、食い過ぎて非常に苦しんだ人も居た。食いバテはよしましょうね。　—以上—

○気象係　　笠原

海谷は残雪期の山です。ですから主に雪の状態について資料などを参考にして記してみたいと思います。
海谷の尾根は急でどの沢もせまい。たえず雪崩発生に注意しなければならない。
沢自体も5月になればクレバス、アロッ雪崩が生ずるから御注意。また5月になると昌帽と阿弥陀の稜線はブリコが多くなるから早めに計画するとよい。
割り岳のP1は広々とたブナ林だから、ガスった時はよく注意したい。また雪どけによる増水にも気をつけない。実際そうとうはげしかった。
雪ポヨけっこう大きいのが東側に発達していた。
雪の状態からみると入山は4月の中旬より5月のゴールデン

ウィークの前後が上策と思われる。
僕達の入山は少し早すぎた。雪が多く、入山にてまいり出かそうだったから、経験の感触をじゅう分楽しんでいかった。

○海外編　　堀内

バスについては25日の〈参考〉を見て下さい。
資料は僕の所に少しありますが、しかし、詳しく知りたい方は長野のガイドブックもしくは、高田の上越山岳会（高田市西城町1丁目 鏡村吉治方）高田高校山岳部等にお聞き下さい。

○Essay編　　イカイ

今回は付くしかなかったということで贅沢するはずであったがさて蓋を開けてみると、まあ感覚は恐ろしいもので、結局1日2食ぐらいなかなかすつしまった。しかし晩飯などはバンドをゆるめてヒーヒー言うぐらいで、結構充実した食事をもった。いつもと変った所では昼食に従来のカンパンをやめてサンドウィッチにしたことである。なるほど昼時になるとサンドウィッチが待ち遠しくて待ち遠しくてしかたなかったが量の面腹もちの方から考えるとまだまだ個人山行の域を出ないようである。

〈メモ〉

5.雑感

◦猪飼啓之

個人山行として海谷山塊に行こうと誘われた当初はあまり気乗りしないのが実情であった。越後の山ということで雪が相当深くて大変だろうというぐらいの知識しかなかったが、ガイドブック etc. をあさっているうちに、〝小上高地〟という語が妙に自分の心をとらえた。

北アの上高地に初めて行ったのは大学一年の秋(S.40年)涸沢へ、ひとりで登った時で帰りのバスからみた静寂につつまれた大正池と入陽にはえる初冬の穂高は誰の心も魅惑したことであろう。あれから何回となく行ったり写真をながめたりしたが上高地のあこがれは衰えることなくますます心の奥深く浸透していった。

〝小上高地〟へのあこがれをいだいて糸魚川の駅におりたのは、春山合宿も終った7月25日であった。それからバスで約30分で降りて今日の幕営地に向って歩き出した。

二日目に〝実にやっとのこと〟B.C.地点にたどりついた。途中雷鳴がどんどん落ちてきもを冷やすこと再三であり、雪がやわらかくて下腿までもぐること再三再四であった。結局当初一日の予定を2日もかかってしまった。

B.C.を張った所は雪原の河のそばで上高地にたとえればたぶん白樺の木にかこまれ梓川の清流を見おろす小梨平あたりにたとえられるであろう。上高地の例にもれずまわりは1500メートルの山々がそびえており夏になれば土でかしすばらしいだろうと思われる。しかし夏はブヨがひどくて登れないとのことであるが沢の遡行は一度やってみたいものである。

我々がまわりの山に登ったのは天気が悪くて退却した日を除いてはたった1日であったがB.C.から3ピッチぐらいで頂上を踏むことが出来、その山々は十分すぎるほど山の魅力を我々に与えてくれ、山の醍醐味を教えてくれた。帰りはグリセードで快適にすっとばしたと言いたいところだが残念ながら雪が柔らかくシリセードに終ってしまった。海谷山塊そして〝小上高地〟はまだまだ我々に魅力ある山行を与えてくれる山々であることにちがいない。

——以上——

○山下泰弘

今回の海谷山行は自分にとって非常に意義深く忘れざる山行となったと思う。
これまでは常に上からの指示によって動いていたのであるが、今回にいたっては、自分達で研究し、考え、判断し、そして行動したのである。
また今までの山行は岩なら岩、雪なら雪というふうに、その各合宿に於ての登り方はそれぞれ分れていた。しかし我々は様々なバリエーションに恵まれた海谷山塊に於て、これまでに修得してきた技術をフルに活用し、自れの力を充分発揮することができたと思う。腰までのラッセルやアイゼンワークから、雪壁登りやアップザイレンにいたる楽しい山登りが出来た。頂を極めた時歌の台詞じゃないけれど『おかア幸福だなあ』としみじみと感じたね。実際海谷という所は実に素晴らしい所だ。千丈ヶ岳、旗振山から阿弥陀山に続く赤茶けた垂直な岩壁、あるいは、はるか下方にクレバスが大きな口を開けているのを見ながら、まっすぐにたれ落ちたリッジを登った鉢山、アンザイレンしてやっと頂上を踏んだ阿弥陀山、そしてピンチフードを食いながらやっと頂上近くまで登ったが雪庇のため頂上に立つことができぬまま下ることを余儀無くされた烏帽子岳、海谷は実に楽しかったね。今にもナダレをうな雪面をトラバースし、後方でそのナダレの音を聞いた時はゾーとしたね。しかし後にはナダレの音を聞いても、また少しくらい上から落ちてきても感じなくなった。海谷では昼頃になると10分間に1発は落ちていた。夜も引っきり無しに落ちるのである。おかげでデブリ歩きはうまくなった。
個人山行では往往にして慣れ合いムードになり気が緩みがちであるが、どの山行に対しても同じような しっかりした態度でのぞみたいものである。最後になったが春山で3kgも肉つきがよくなったのに海谷ではさらに肉つきをよくしてくれた畜産科のエッセー係には感謝の意を表したい。

―― 以上 ――